

## 入選

### 当たり前にある親切

香川県 四条小学校

6年 松浦龍也

「えっ！」

部屋に入ってすぐに目の前に広がる光景に、ぼくは目を見張りました。中には、数十人の小さな子どもから大人まで、人が集まっていて、ほとんどの人が身ぶり手ぶりでお互いに会話をしているように見えました。ぼくは、それが「手話」だとすぐに分かりましたが、こんなにたくさんの方が、「手話」でコミュニケーションをとっている様子を今まで見たことがなかったため、とても驚きました。

今年の6月、母や妹といっしょに、岡山県倉敷市で開かれたある食事会に参加しました。母は、大学生のとき、手話サークルに入っていて、耳の不自由な人たちのサポートをしていたそうです。この日は、当時から交流の続いているサークル仲間たちが集まってきていて、耳が聞こえる人も聞こえない人も、みんな笑顔で手話を混じえて、とても楽しそうに会話をしていました。

会のリーダーさんたちは、来る人来る人をていねいに案内したり、お菓子や飲み物が減ってきたら、声かけをして足してあげたりと、細かい気配りをとても自然にしていました。大人だけでなく、初めて会う子どもたちも、周りの大人が気遣って声かけをしてくれて、すぐに仲良くなれました。

岡山県に向けて出発する前、「大学手話サークルのみんなといると、心がとってもあたたかくなるんだよね。」とお母さんが言っていたその言葉の意味が、ぼくは分かるような気がしました。みんな、手話を特別なものではなく、まるでふだん使っている言語のように使っていました。

お母さんは、十分に手話ができなさそうだけれど、身ぶり手ぶりも使って、一生懸命相手に思いを伝えようとしていました。その姿に、耳の聞こえない相手に対する思いやりを感じました。

お母さんは、

「耳の聞こえる人、聞こえない人、障がいのある人もない人も、お互いをまったく違った人間だと思わず、みんながお互いを理解して、優しい気持ちで接することができたら、幸せだと思う。」と教えてくれました。本当にその通りだと思います。食事会では、子どもから大人までみんなが思いやりを持って接してくれていたのです。障がいも親切も特別なこととは感じませんでした。

ぼくの周りにも、小さな親切をしている友達がたくさんいます。でも、けんかや人の心を傷つける言葉を言ってしまったり、聞いたりするときもあります。今回の経験のように、友達とも、お互いのことを理解して、優しい気持ちでコミュニケーションを取ることができたら、きっとみんなも毎日心がほっこりすると思います。

「親切が当たり前のようにあふれている」。そんなクラス、学校にすることが、小学校を卒業するまでのぼくの「小さな親切目標」です。